

弁慶説話

—— 出会の場面について ——

八木直子

はじめに

義経と弁慶と言うと、五条橋の上での対決場面が有名である。五条の橋の上で、大男の弁慶が薙刀を振り上げ、牛若丸に切りかかる。牛若丸は、ひらっと飛び、行ったり来たりする。扇で手招きをしては、弁慶を翻弄する。鬼のような弁慶も、さすがに牛若丸にはかなわぬと降参する。

これは、小学校唱歌（「牛若丸」）や絵本（「牛若丸と弁慶」昭和12年 講談社の絵本）で親しまれている五条橋での出会の場面だが、『義経記』には、五条橋での出会いは書かれていない。『義経記』での最初の出会いは、五条天神である。また、『平家物語』では、出会の場面について一切触れられていない。

本稿では、まず義経と弁慶との出会の場面に焦点をあて、『義経記』と御伽草子『弁慶物語』、『じぞり弁慶』、『橋弁慶』について比較してみる。そして、出会の場として五条天神、清水寺、五条橋界限が選ばれた作品があるのに対し、そうではない作品もあることがわかる。出会の場として、北野天満宮や法性寺が選ばれた背景について考察してみたいと思う。

一、義経と弁慶との出会い

では、それぞれの作品について、簡略に触れてみたい。まず、『義経記』巻三

は、弁慶の出生から、義経と主従の契約を結ぶ過程が描かれている。この話の筋は『弁慶物語』もほぼ同じと言える。ただ、『義経記』では、その後、義経に付き従い平泉へ落ちてゆき、頼朝の軍勢に攻められ、死に至るまでの弁慶を記しているのに対し、『弁慶物語』ではそこまでは物語っていない。

『じぞり弁慶』は弁慶の出生から五条橋での出会いまでを描いている。また、『橋弁慶』は、その名の通り、五条橋での対決を中心に、主従の契約を結ぶまでが描かれている。

①『義経記』の場合

それでは、先ず『義経記』から見ていきたいと思う。書写山でひと波乱起こしてきた弁慶は、都で太刀千振りを得たいと願い、通行人から太刀を強奪していた。

六月十七日、弁慶五条の天神に参り、夜とともに祈念しけるは、「今夜の御利生に、弁慶によからん太刀与え給へ」と祈誓して、夜更ければ、天神の御前に出でて、南へ向いて行きければ、人の家の築地の際に佇みて、天神へ参りの人の中に、よき太刀持ちたる人をぞ待ちかけたる。⁽¹⁾

九百九十九振の太刀を奪い取った弁慶は、六月十七日、千本目に立派な太刀を得るため、五条天神に祈願しに行く。そこで、義経と出会い、第一回目の対戦となる。しかし、義経の戦法に翻弄され、決着がつかなかった。あきらめのつかない弁慶は、何としても義経の黄金作りの太刀を奪いたいと思う。

明くれば六月十八日なり。清水の観音には、上下参籠する所なれば、弁慶何

ともあれ、作夕の男は今宵清水にぞあらんずらん。参りて見ばやと思ひてぞ参りける。

あからさまに清水の総門に佇みて、待てども待てども見え給はず。今宵もかくて帰らんとするところに、何時もの癖なれば、御曹司夜更けて、清水の坂の辺りにまた例の笛こそ聞こえけれ。

こうして、第二回目の対戦は、清水の坂（五条坂）で行われる。しかし、義経は弁慶をさらりと交わし、姿を消してしまふ。清水寺での通夜へ向かった義経に弁慶はついて行く。そして、第三回目の対決が、参詣にやってきた人々の前で繰り広げられる。

二人はやがて舞台へひらと下り合うてぞ戦ひ給ふ。始めは人も怖ぢて寄りざりけるが、後には面白さに行道をする様に、ついでめぐりてこれを見る。

清水の舞台での対決により、弁慶が降参し、義経と主従の契約を交わすことになる。以上が、『義経記』の主従契約に至るまでの対決場面である。第一回目が五条天神、二回目が清水の坂、三回目は清水の舞台であった。

『義経記』では、巻二巻末の「義経鬼一法眼が所へ御出での事」では、義経は、鬼一法眼が差向けた湛海を五条天神で討つことになっており、巻三巻頭の「熊野の別当乱行の事」では、弁慶の母の五条天神への参詣が物語の発端となっていることと、さらには、「弁慶義経に君臣の契約を申す事」の章段においては、弁慶の五条天神への祈念が義経との出会いのきっかけとなっていることなど、物語の主要な舞台に五条天神が選ばれている。

『義経記』と五条天神との関わりについては、角川源義氏によって、一条堀川に住んでいた陰陽師らと『義経記』の語りとの関連について以下のように述べられている。

鬼一法眼は一条堀川に住む陰陽師法師（古本には園城寺法師）で文武二道の達人者だったという。一条堀川には安倍晴明の橋占いで有名な戻り橋がある。陰陽道の大家安倍晴明は、妻が職神（陰陽道で呪詛などに使う人形）の顔を恐れたので、戻り橋の下にこれをかくしおいて使った。吉凶の橋占いを問われると、その職神は人の口に移って善悪を示した（『源平盛衰記』）。戻り橋の近くに晴

明社があり、この付近に陰陽師、声聞師、散所などの集団もあって、鬼一法眼譚もこの集団の伝承するものだったろう。頼光の四天王のひとり渡辺綱が、この戻り橋で鬼女の手を斬った話にも安倍晴明が登場しており、やはりこの集団の伝承であった。鬼一法眼も集団の住人のひとりであり、陰陽師であったのは興味深い。（中略）陰陽師、声聞師、散所などは、常に雑居していたらしく、よく混同された文献が早くからある。（中略）鬼一法眼が住んだという一条堀川の陰陽師、声聞師なども、上御霊の傍らに住む北畠の声聞師や、禁中に近かったゆえに「御近所の声聞師」といわれた桜町の声聞師とともに、義経物語に参与していたと見てよいだろう。（中略）五条天神には一条堀川に住む陰陽師鬼一法眼の徒党が奉仕し、その呪力によって疫病を撃退していた。「鬼一」の名も鬼の名によって鬼の子孫を称し、陰陽師や声聞師など、山の宗教家にそれが多いのも一つの特徴であった。「鬼一」の「いち」は神をいつく者を意味し、神に奉仕した呪術者の身分を明らかにしている。「〇〇いち」と称する者に、語り物を語った琵琶法師が多いのも、神に仕えた下賤な芸能家によって、語り物が行われていた証拠としてよいだろう。

つまり、一条堀川に在住していた語りの集団が五条天神に奉仕していた。その語りの集団は、義経伝承にも関与していたという事を詳しく論じられている。五条天神に奉仕していた例の語りの集団が『義経記』の一部を語っていたことを指摘されている。すなわち、角川氏は「語り手」とその語りが行われた「場所」という点に着目されている。これらのご意見を踏まえつつも、その語りの対象となった人々、つまり、「聞き手」にも目を向ける必要があると思われる。

②『弁慶物語』の場合

以上、『義経記』における出会いの場面について、見てきた。次に、これまで見てきた『義経記』巻三の内容に相当する『弁慶物語』について確認してみたいと思う。『弁慶物語』を理解するにあたって、諸本について整理する必要がある。少し触れてみたいと思う。（表一）諸本については、様々に分類されているが、刊本系の本文が比較的異同が少ないのに対し、写本系の諸本では異同が多いと言われ

表1 弁慶物語の主な諸本

写本	『武蔵坊弁慶物語絵巻』 穂久邇文庫蔵 (『未刊国文資料 未刊御伽草子集と研究二』)
『弁慶物語』	京都大学国文学研究室蔵本 (京大本。京都大学国語国文学資料叢書14) 東大本 岩瀬文庫本
	慶應義塾図書館蔵 (慶應本。『古典資料研究』5)
	元和七年写本 (元和本。『室町時代物語大成』12)
	天理図書館蔵本 (天理本。『山辺道』28)
	チェスタービーティ図書館蔵 (CBL本。大系本の底本。)
	慶応義塾図書館蔵 (『室町時代物語大成』12)
	(『島根大学文学部紀要』10 11)
刊本	『武蔵坊絵縁起』
	古活字本
	古活字別本

いる。

弁慶に関する独立した作品の中で、現存する最古のものとされているのが、『武蔵坊弁慶物語絵巻』である。特徴は、本文が他の諸本と大きく異なっていることである。藤井隆氏³⁾によれば、室町時代中期を下らぬ書写であるとされている。内容については、弁慶の出生を描いていたと考えられる、巻頭部分が残っていない。現存部分について、『義経記』と比較してみると、前掲書の藤井氏が、「本書が義経記の影響を受けていないのは明らかである」と述べられているほど、同じ題材を扱った作品とは言え、異なった説話が収められている。例えば、『義経記』には記されていない、太刀・具足調達や、渡辺館で財を乞う事、渡辺館で賊徒を退治する事の三話を載せているのに対し、『義経記』で一章段にわたって語られている書写山⁴⁾については、全く触れられていない。

では、出会いの場面について見てみると、

さるほどにべんけいは、ほつくくにおもむかばやと思ひつゝ、まづみやこへぞのぼりける。もとよりいさかいしゆ行の事なれば、いかなるおこの物にもいであはさやとおもひけるに、そのころ五でうのはしのほりにて夜ごとにつじぎりをするものありとふうぶんす。(中略)むさしほうべんけいは、五でうのはしにてしうくの御けいやく申せし⁵⁾。

として、北国への修行の旅をやめて、五条橋での出会いを描いている。そして、『義経記』が多くの紙面を費やして描いた、都落ち以後については、簡略にあら筋

を語って終わらせている。

また、同じく写本系に分類されているが、異なった話の展開となっている『弁慶物語』の記述を見てみる。まず、『武蔵坊絵縁起』と呼ばれる伝本から読んでいきたい。表2の【諸作品対照表】の『弁慶物語』の欄については『新日本古典文学大系』⁶⁾を基に作成した。『新大系』の底本は、チェスタービーティ図書館蔵 (CBL) 本である。では、本文を見てみたい。

場面①

頃は六月十五日の夜の事なるに、洛中をこ、かしこと伺ひ見れども、さるべき物もなかりけり。やうく歩み行くほどに、北野の御前に参りけり。

(弁慶、坂本へ行く。)

場面②

頃は七月十四日の夜、弁慶いつもの装束にて、長刀杖に突きて、法性寺の方へ行きけるに、その音気高き笛ぞ聞こえける。

場面③

又、八月十七日の夜、清水へ件の男や参らんと思ひ、清水指して参りけり。

場面④

：「げに、おもしろし御坊。在所はいづく。」とのたまへば、「五条河原こそ、広々とよし。」と言ふ。

場面⑤

清水を下向して、五条の橋の真中を勝負境に定めたり。⁷⁾

となっている。書写山再建のため、財を募ろうと考えた弁慶は、一先ず都に上る。そして、義経と出会い、主従契約を交わす事になる。

場面①によると、六月十五日の夜、北野天神で義経に会うことになっている。兵法に長けている義経は、八尺もある築地を飛び越えて姿を消してしまう。場面②、七月十四日夜の、法性寺では対戦できずに、義経を取り逃がしてしまう。次に、八月十七日の夜には清水寺へと向かう(場面③)。やっと、義経を引き止める事がで

きた弁慶は、対決の場所として、五条河原を指定する(場面④)。そして、いよいよ五条橋で決着をつけることになる(場面⑤)。この『弁慶物語』では、四回出会うことになっている。そして、出会いの場として、他作品には見られない法性寺が登場する。また、『義経記』と同様に、日付けが記されている。

さて、他の作品はどの様に描いているのか、もう少し見てみたいと思う。

『じぞり弁慶』

歳頃十六七の小冠者、五条の橋にた、ずみて行き来の人を悩ます⁽⁸⁾

『橋弁慶』

都五条が橋にをひて千人斬りのある由を、弁慶つぶさに承りて⁽⁹⁾

『じぞり弁慶』、『橋弁慶』においては、義経との出会いは、五条橋となっている。

二、北野天満宮、法性寺に関する一考察

以上、諸作品における、出会いの場所について見てきた。表2の「諸作品対照表」からも出会いの場を五条橋とする(五条橋説)を扱っている作品が多く見受

表2 諸作品対照表

事柄	作品	
	義経記	武蔵坊弁慶物語絵巻
義経と弁慶の出会いのきっかけ	弁慶が太刀千振を得たいと願い、九百九十九振得た後、義経に出会う。	牛若丸が辻きりをしており、弁慶がこれを討とうとする。
対戦の回数	三回	一回
出会った場所	五条天神 清水の坂 清水観音堂	五条橋
出会った日	六月十七日(五条天神) 六月十八日(清水観音)	六月十五日 七月十四日 八月十七日
		弁慶物語(CBL本)
		じぞり弁慶
		橋弁慶

けられる。

しかし、『義経記』では、五条橋での出会いは一切語っていないのに対し、清水での対決を描いている。この事について、岡見正雄氏は、

「五条の橋での合戦、橋弁慶譚もそれが清水への参詣道であったので、弁慶と御曹司が清水の観音で合戦するようになっていた義経記の形は古い原型であったのではないか。」⁽¹⁰⁾

と指摘されている。また、『看聞御記』永享九年(二四三七)年七月十九日条には、内裏の孟蘭盆会の御灯笼を拝見した事が記され、「清水風情、牛若弁慶切り合の風情なり、殊勝の一段目を驚かす」とあり、清水での対決場面を描いた灯笼が評判になったことが分かる。つまり、永享九年前後には、『義経記』の語る清水での対決話が一般に知られていたと考えられる。

また、『義経記』巻第三「弁慶義経に君臣の契約を申す事」では、二回目の出会いの時として、六月十八日の清水観音の縁日を設定している。そして、弁慶が清水寺の観音の縁起についてこう語っている。

「この観音と申すは、坂上田村丸建立し奉りし御仏なり。『我三十三遍に身を變じて衆生の願ひを満てずは、祇園精舎の雲に交はり、永く正覚を取らじ』と誓

※古活字別本「法性寺」。元和本「法勝寺」。東大本、天理本「おんしやうし(園城寺)」。

ひ、『川原を越えて我が地に入らん者をは、福德を授けん』と誓ひ給ふ御仏なり。されども弁慶は福德をも欲しからず、ただこの男の持ちたる太刀を弁慶に取らせて賜べ」と祈誓して門の前にぞ待ちかけたる。¹²⁾

弁慶の言葉を借りて、語り手がわざわざ清水寺の縁起を語っているように思われる。

清水寺とへ義経と弁慶の主従物語との関わりについては、先学によって、以下のように述べられてきた。まず、岡見正雄氏は、

「清水寺は今でこそ観光のお寺さんであるが、室町びと、この義経記が成立した時代の人々にとって、庶民にとっては、清水の観音は東京でいえば浅草の観音様であった。(中略)殊に室町時代には観音の縁日として重んぜられた六月十八日の夜に、大の男の弁慶が参りの人の環視の中で、引いつ進んづ遊ぶように戦って主従の契約を結ぶというのは美しい絵様、室町ごろであって、…」¹³⁾

さらに、アフマド・M・ファトヒ氏は、縁日と語りとの関係について着目されている。

「清水寺縁起や縁日のときの庶民の参詣状況などがあれほど詳細に語られるのは、当時非常に清水寺が庶民に親しまれていて、清水寺の観音が民間信仰において大きな存在であったからであろう。そこで義経と弁慶との再会及び主従関係成立の舞台として清水寺が選ばれるのは、やはりその当時の民間信仰や語りの状況などから見て、五条天神社と同様、必然的であったと思われる。」¹⁴⁾

語り手は、ある時は、弁慶の言葉を通して清水寺の縁起を語り、大勢の人が集まる縁日にこの主従物語を語っていた。つまり、縁日と語りは一体のものであったと述べられている。

以上の事から、室町時代の庶民の生活に密着していた清水寺の観音信仰の形跡を窺い知ることができる。その縁日において、義経と弁慶との主従契約の物語が語られていたと考える。そうすると、地理の面から見ても、清水寺への参詣道にある、清水坂(五条坂)・五条橋・五条天神が主従契約に至る対決の場所として物

語に登場してくるのも自然の流のように見える。

これに対し、地理の面から見て不自然な北野天神と法性寺はなぜ対決の舞台となったのか疑問に思われる。表2の【諸作品対照表】からも分かるように、『弁慶物語』(CBL本)では、対決の場として、北野天神・法性寺・五条橋となっている。また、『弁慶物語』の写本の一つである「慶應本」¹⁵⁾においては、北野天神と五条橋で対決することになっている。

『弁慶物語』(CBL本)では、六月十五日の夜、北野天神で戦う事になっている。義経が「小鷹の法」や八尺の築地を飛び越えるという離れ技を披露する。まるで、義経の武術を身せつけ、超人的な人物であったことを印象付ける場面のように思われる。『義経記』では、弁慶によって清水寺縁起が語られていた。それに対応し、『弁慶物語』「元和本」では、弁慶が北野天満宮について以下のように語っている。

当社権現は、殊更諸社にこえて、慈悲深重に御座、因位に、ざんげんを、うらみ給ひて、偽を糺すの天神と、名をゑたまへり。然るに、弁慶は、親もいろいろす、師もおしへず、みづから発心の出家也、流転三界の文を唱て、われと髪をそり、衣をそめて、心をそめず、さて悪行をいたす時は、又衣鉢をけがす、まんしん也はみないつわりになりゆく間、いましめんがために、男の姿とへんして、ましくける、ござんなれ、あわれ和光垂迹の御じひほど、ありがたき事は、よもあらじとて、社且にちかづき奉る。¹⁶⁾

このように、『弁慶物語』「元和本」においては、北野天満宮縁起について記されている。これは、CBL本や古活字本にはない部分である。『弁慶物語』と北野天満宮との関連を考える上で重要になってくる箇所だと思われる。

さて、北野天神について、簡略に述べると、京都市上京区の北野天満宮のことで、北野天神とも呼ばれている。天曆元年(九四七)年に北野の地に創建され、菅原道真を祀っている。建武三年の足利尊氏の勝利祈願をきっかけに、歴代將軍の庇護を受けることになる。そして、室町時代に、最盛期を迎える。一方、室町期以来、庶民の参詣でにぎわっていた北野天神界限は、猿楽や曲舞の興行の場とされていたようである。また、天神信仰について調べてみると、へ弁慶の物語がすでに

形成しつつあった室町中期ごろには、『北野天神根本縁起絵巻』等によって、天神は十一面観音の垂迹として信仰されてくるようである。つまり、この時代、学問の神として祀る一方で道真を観音と同一視し、諸芸の神としても信仰されていたということになる。

また、法性寺については京都市東山区の九条河原、鴨川の東岸にあった寺で、延長三年(九二五)、藤原忠平によって創建され、開山は天台座主法性房尊意による。その本尊は、千手観音であったという。

これらの事から、北野天神、法性寺、いずれについても、観音信仰との関わりが見えてきた。

結 び

今回は、義経と弁慶との出会いの場面について、諸作品の本文を取り上げつつ、見てきた。特に、今まで論じられることのなかった北野天満宮や法性寺について考察を試みた。

しかし、現段階において単純に中世での観音信仰の隆盛が『弁慶物語』に反映したと言うには、あまりに資料が少なく、結論付けるまでには至っていない。出会いに至るまでの動機についてなど今回扱いきれなかった問題は多く、それらについては、テキストをさらに詳細に読むことが必要である。

また、同時代に成立した他の作品、資料等における北野天満宮や法性寺に関する記事や中世の人々にとっての観音信仰や天神信仰についての記事についても幅広く見るといふことなど多くの課題を残すことになってしまった。

今後の作業としては、『義経記』や御伽草子類(『弁慶物語』・『じざり弁慶』・『橋弁慶』)とともに、今回取り上げることのできなかった同時代の芸能である謡曲や幸若舞曲(『未来記』・『笛之巻』・『烏帽子折』)では、五条橋や清水での御曹司との出会いを採っている。)とも比較したいと考えている。

- 注
- (1) 義経記(田中本)『新編日本古典文学全集』二〇〇〇 小学館
 - (2) 角川源義『義経記』の成立 角川源義全集 一九八三 角川書店
 - (3) 藤井 隆 未刊御伽草子集と研究 一九五七 未刊国文資料刊行会
 - (4) 『義経記』と『弁慶物語』について

多くの絵巻や物語に通じていた後宗光院貞成親王の日記『看聞御記』の永享六年(一四三四)十一月六日条に「武蔵坊弁慶物語二巻」と記されていることから、(弁慶の物語)は室町時代前期には成立していたと考えられている。室町前期(十四世紀)ごろに出来上がっていた(弁慶の物語)を『義経記』『弁慶物語』が別々に取り入れて成立したとされている。つまり、従来の研究では、『弁慶物語』は『義経記』卷三の影響下に成立したものではないと言われている。

- (5) (3)と同掲書。
- (6) 弁慶物語(CBL本)『新日本古典文学大系』室町物語集下 一九九二 岩波書店
- (7) (6)と同掲書。
- (8) じざり弁慶(奈良絵本)『室町時代物語大成』卷六 一九七九 角川書店
- (9) 橋弁慶(奈良絵本)『室町時代物語大成』卷十 一九八二 角川書店
- (10) 岡見正雄『義経記』日本古典文学大系 一九五九 岩波書店
- (11) 看聞御記『統群書類従・補遺』一九三〇 統群書類従完成会
- (12) (1)と同掲書。
- (13) (10)と同掲書。
- (14) アフマド・M・ファトヒ『義経記』と『ペーバルス王伝説』——英雄に対する神の庇護と主従関係の成立——『中京国文学』第一号 一九九一
- (15) 弁慶物語(慶應本)『古典資料研究』第五号 二〇〇二 古典資料研究会
- (16) 弁慶物語(元和本)『室町時代物語大成』卷十二 一九八四 角川書店
- (17) 大島建彦・蘭田 稔・圭室文雄・山本節編『日本の神仏の辞典』二〇〇一 大修館書店
- (18) (17)と同掲書。